

No. 317【2018年8月3日配信】

明治25年に落成した2代目町役場 (担当: 工藤)

こんにちは！ 室長の工藤です。

今回は久しぶりに庁舎の話題で、2代目の町役場をご紹介します。

明治25年(1892)12月4日に落成式が執り行われた2代目の町役場は、明治29年5月14日の大火で類焼するまでの間、3年5か月ほど使われました。場所は新浜町、現在のしあわせプラザの附近にありました。

新しい町役場の建設計画が始まった時期は分りません。ただひとついえることは、明治25年8月頃から新聞紙上で、すでに始まっていた工事に目が向けられるようになりました。たとえば、9月10日に開催の青森町会の常設委員会の議事には「新築工事の中止」があがっています。これは、役場の新築工事について、この常設委員に諮らずに7名で構成された設計委員に諮ったことに対して、常設委員の一部が反発したものとみられます。

さらに、この頃しばしば行われていた政談演説会で、設計委員の中心人物と目される柏原源四郎を名指しして工事の「怪計」を質しています。「怪計」とは何を意味するのは分かりませんが、演説会では工事の内容が仕様書と異なることや入札の方法について疑問が投げかけられています。

一方、町の側では、9月下旬に町会議員による工事現場の視察を実施しました。この時点での工事の進捗状況は、まもなく「壁付」に着手できる段階とのことで、骨格部分はできていたものと見られます。そして、視察を実施してみると、例えばヒバ材を用いるべき箇所が松材になっているなど、仕様書と異なる点が次々と明るみになりました。視察した議員は、役場の新築工事はこのままでは町民の信用を得られず、工事監督者は責任を免れないだろうと語っています。

ただ、こうした経過を経つつも、何とか12月6日の落成式にこぎつけました。式上、設計委員の柏原源四郎はスピーチを行い、将来青森町が市制を施行したとしても十分使用に耐え得るものであると、新築の役場に胸を張ります。しかし、翌年7月～8月にかけて屋根の葺き替えをはじめ、修繕が必要となる破損箇所がそこかしこに見られるようになり、町民のなかにはこれに不満を抱き、役場に談判に出向いた人たちもいたようです。建設段階での杜撰な工事の影響だったのでしょか…。

加えて、この役場は冒頭でも記したように、明治29年の大火で焼失します。当時青森町は市制施行の実現に向けて盛んに動いている最中ではあったものの、柏原の希望は残念ながら叶わなかったのです。